

2014年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（長期／短期）
 所属・職・氏名：国際学部・教授・山本 雅代
 研究課題：英語-日本語受容バイリンガルの言語発達
 留学期間：2014年11月28日～2015年2月28日
 留学先：国・都市 アメリカ合衆国・ハワイ州ホノルル市
 研究機関 ハワイ大学マノア校

研究成果概要

留学の主目的は、平成 21 年度に採択され、その後、平成 24 年に 2 度目に採択された科研費による、通算 6 年にわたる「英語-日本語受容バイリンガルの言語発達」研究を進めることであった。

本研究の対象となっている家族は 2 家族（E 家族および L 家族）であるが、これまでの分析は E 家族を中心に行っているため、今回の報告もその家族について行う。

E 家族はハワイ州ホノルル郡に居住しており、これまでの調査では、母親が、月に 1 度、バイリンガル女兒（以後、女兒）との対話を採録し、筆者が年 2 度、現地を訪れて母親と女兒の面談をするという方法でデータを収集してきた。これらのデータの分析から、近年、女兒が就学期に入ってから時間経過に伴い、親子間、とりわけ母親の言語の使用のあり方に顕著な変化が生じていることがわかった。一方、年に 2 度の面談調査では、筆者の滞在期間が約 1 週間と短く、平日学校で授業を受けている女兒を含めた面談可能日が限定されてしまい、面談日時の設定が難しくなっており（加えて、女兒が反抗期の入り口にさしかかっていること、また交友関係など自身の予定も増え、近年は、親に同伴して面談に積極的に臨むということに消極的になっていることなどもあり）、面談を通して、女兒から直接、日常の言語使用状況を聞き取る、また面談の場での女兒の実際の言語使用状況を観察する機会が得にくくなっていた。

そうした状況下、今回、留学を機に筆者が、対象家族が生活する現地に一定期間滞在することで、面談のスケジュールが調整しやすくなるため、対象家族との接触の機会を増やし、女兒を含めた面談を実施し、併せて、面談で行う聞き取りの中味をより深化させることを目指した。

目指したことがすべて実現できたわけではないが、今回の留学期間内に、面談の機会を月 1 回、通算 3 回（1 回目：12 月 11 日／2 回目：1 月 19 日／3 回目：2 月 20 日）実施することができ、2 回目の面談には女兒の同席も得られた。紙幅が限られているため、以下では、1 回目と 3 回目については、母親からの聞き取り内容を略記するに留めるが、2 回目の面談には既述の通り、女兒も同席し、簡単な文法理解テストを実施することができたので、それについては少し紙幅をとって、結果を記載しておく。

■ 1 回目（2014 年 12 月 11 日）参加者：母親、筆者

ここではハワイに移住してきた当初からの母親の言語環境、言語使用を中心に聞き取りを行った。

- ・ハワイへはいわゆる語学学校へ通うためにやってきたので、当時は英語がさほどできるわけではなかったが、その後、ロサンゼルス出身の英語母語話者男性と出会い、結婚し、アメリカ（ハワイ）に永住することとなった。以後、英語が徐々に堪能になり、現在では、とっさの時に出てくる言語は英語というほど、その能力は高く、日常的に用いる言語ともなっている。一方で、（仕事では日本語を用いる必要があることも手伝って）日本語も失わずに、成人レベルの母語話者の能力を保っており、極めてレベルの高い日本語-英語の産出バイリンガルとなっている。
- ・子どもたちにも日本語が使えるようになって欲しいと考えているが、夫が日本語を全く解さない

ため、夫がいる場では英語しか話すことができない状況にある。

- ・子どもたち（女兒とその兄）も、現地の学校へ通い、交友関係がすべて英語で行われるため、現在では、日本語を使う機会がほとんどなく、母親が日本語で話しかけることがあっても、返ってくるのは英語となる。
- ・母親は、女兒と話す時には日本語を使うよう心がけるものの、母親が話している内容を理解していないと思われる時にはついつい英語を用いてしまうと語る。

■ 2回目（2015年1月19日）参加者：母親、女兒、筆者

本人の意向に反しての参加であったのか、女兒は面談開始から不機嫌な態度が顕著であったが、言語テスト（文法）には興味を示し、積極的に解答するなど協力的な一面も見せた。

- ・テストの結果のみを簡潔に報告する：格助詞の違いに応じた文意の違いを判断できるか否かを見る10問からなる簡易なテストであるが、2009年度に1回目を実施し、2013年度に2回目、そして今回留学中の2014年度（1月19日）に3回目を実施したものである。このテストでは、たとえば、青い色のクマが赤い色のクマを手で押している場面とその逆に赤い色のクマが青い色のクマを手で押している場面が描かれた2枚の絵を並列でみせながら、「青いくまさんが押ししました」に該当する絵はどちらか、指差すように指示するものである。女兒の第1回目の正解率は40%、2回目は50%、3回目も50%であった。正解の確率を50%とすれば、格助詞の違いと文意の違いを理解しての解答として解釈することは難しい。比較参照のために、もう一方のL家族のバイリンガル男児（以後、男児）の結果を報告しておく、研究開始時点の日本語能力はE家族の女兒のそれよりも格段に高く、現在でも母親の日本語による問いかけに、それなりに日本語で答えることが出来るだけの能力を保持している。この男児の正解率は、第1回目、2回目、3回目のすべてにおいて80%であった。

■ 3回目（2015年2月20日）参加者：母親、筆者

2回の面談に臨んだ女兒の様子から、3回目の面談が、再び、本人の意向に沿わないものであった場合には、今後の調査（対話の採録、面談）に負の影響を及ぼすことが懸念されたため、この面談には母親のみを参加者として実施し、今後の言語使用に関する現在の考えを伺った。

- ・母親も、自身の言語使用について、子どもへの英語の使用が多くなっていることを自覚しており、そのことによって、ますます子どもの日本語使用が減じることも理解、懸念している。自身の言語使用のあり方を変えねばならないことを自覚しているものの、日々の生活の中で、英語が占める領域、空間が大きいことから、なかなか難しいと感じている。
- ・母親によれば、最近、兄の方は、アルバイトという観点から、ハワイでは日本語ができることが大きな利点となっていることを実感し始めたようすが伺えるとのことであった。
- ・一方で、女兒の方はまだそこまでの認識はないようであるが、母親は、いずれ、その利点に気づくことになるだろうと考えている。
- ・母親は、女兒もその兄も、どちらかと言うと大人しく、自ら積極的に何かをする、話すというタイプではないと語り、そうした点からも、積極的に日本語を使用しようとするのが少ないのではないかと考えているようすであった。それが母親の、自分を納得させるための一つの「理由付け」であるかどうかは不明ながら、日本語であろうと英語であろうと、筆者には、これまでに女兒から何か話しかけられたという記憶がないのは確かである。この点は、L家族の二人の子どもと大きく異なっているところである。

留学中に採録された月1度の母子の対話データの分析は未着手であるが、科研の1年間延長申請が認められれば、平成27年度に、これら分析未着手の対話データとこれまでに分析を済ませた対話データとを併せ、データ全般の分析、考察を行い、一定の結論を出す予定である。

なお、他のバイリンガリズム研究者と共に、アメリカの出版社から、日本（語）のバイリンガリズムをテーマとした論集を刊行する企画を進めており、企画が採択されれば、本研究の成果の一部を収録する予定である。